

燭台つきのピアノ

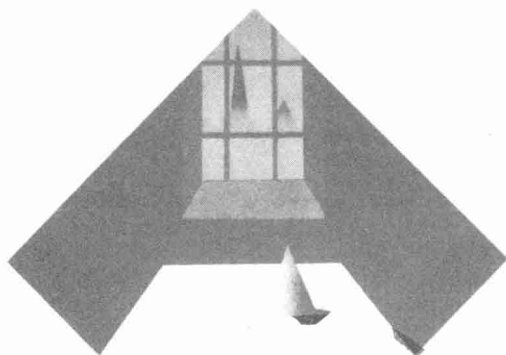
阪田寛夫



人文書院

燭台つきのピアノ

阪田寛夫



人文書院

著者紹介

阪田寛夫（さかたひろお）

1925年大阪生れ。

高知高校在学中に入隊，旧満洲にて終戦。東京大学国史学科卒業。

1975年「土の器」により芥川賞受賞。小説は「花陵」「背教」など，詩集は「サッチャン」「わたしの動物園」など，また歌詞も多数。

1980年「トラじいちゃんの冒険」で野間児童文芸賞を受ける。

燭台つきのピアノ

一九八一年六月一〇日初版第一刷印刷
一九八一年六月二〇日初版第一刷発行

著者 阪田寛夫

発行者 渡辺睦久

発行所 人文書院

京都市下京区仏光寺高倉西

電話・〇七五―三五一―三三九一
振替・京都二一〇三

印刷 錦チューエツ富山工場

製本 坂井製本所

©Hiroo Sakata, Printed in Japan 1981.

落丁、乱丁はお取替を致しませう。

燭台つきのピアノ 目次

聖歌隊のころ	7
中途半端	11
ヨブ	15
運命と摂理	17
おいのり	23
信仰の試験	27
ルカ伝	32
遠藤さんから教わったこと	37
ヨルダン会	45

花と私

むかしの仲間

初舞台

高山の棗

大切な娘御

爆弾三勇士

氷水

交遊抄

少女歌劇

結婚何ゾ？

六丁目

猫の盛衰

田辺君の演説

大洲の一夜

127 121 116 113 108 102 99 95 88 79 74 62 58 53

三浦朱門とのこと

三浦の手紙

土讃線のトンネル

ぼんこつ時代

「馬車馬」と荒本

近所づきあい

サローヤンと庄野さん

鴨の足音

鳥の顔

*

デントンさん

脇田先生の「はいはい」

燭台つきのピアノ

椰子の実一つ

庚申街道

煙草の匂い

*

サッちゃん

ぞうさん

処女作について

輝く断片

**

あとがき

209 205

226 222 217 215

燭台つきのピアノ

聖歌隊のころ

ウィリアム・サローヤンの小説に「長老派教会聖歌隊」というのがある。

それは、十三歳の「私」がフレズノの町のテュレア街にある長老派教会の少年合唱隊に入れられたてんまつ記である。

「私」がある日友達の家でうたっていると、とつぜん隣家の窓からバライファル嬢が顔を出し、

「いまのは、どっち？」

と昂奮して叫んだのである。「私」がうたったとわかると、バライファル嬢は、

「あなたの声はクリスチャンの声です」

と主張し、

「来週から長老派教会へうたいにくるのです」

と、強く誘ったのであった。「私」はまったくその気はなかったのに、友達少年は、信仰深いおばさんの足もとを見て、一回一ドルと吹っかける。おばさんがそれを承知したので、とうとう「私」は聖歌隊に入らざるを得なくなる。

ところが、間もなく「私」は声がわりして、彼女との契約は破棄され、それは「私」にとっては大きな救いだったけれど、彼女にとっては、大きな打撃であった——そういう小説である。

私は少年時代に大阪のキリスト教会の聖歌隊でうたっていたので、この話はいへんおもしろかった。ただし、私が入っていたのは、大人たちによる混声合唱団である。それから、だれも私を誘ったりはしなかった点が違う。

つまり、私は自分の意志によって、積極的に練習に参加した。理由は音楽が好きであったからではなく、好きな女性がそこにいたからである。だから声がわりをしても私はやめなかった。ソプラノから、いっきよにバスにパートが変わっただけだ。

その聖歌隊は毎日曜日、「礼拝」のなかで一曲、聖歌隊だけでさんびかをうたうのが仕事であった。白いガウンを羽織って牧師のうしろにすわっており、その時がくるとやおら立ち上って、真剣な顔でうたうのである。

しかし、その他の時間はすることがない。私はその時間をあげて、好きな女性を身近に観察することにつとめた。他の大人の聖歌隊員はそういう趣味がないために、たいくつのあげく私語をかわしたり、牧師の似顔を書いたりした。それはまじめな信徒にとって、目ざわりなことらしかった。

「この頃の聖歌隊はぎょうぎがわるくて……」

日曜日、教会から帰ってくると、私の両親はよくそう言って批判した。

終戦後、東京の大学に入ると、私はまた性こりもなく教会の聖歌隊に入った。こんどは好きな女性がいたからではなく、指揮者である叔父から誘われたためである。その頃は食料事情がひっばくしており、ガード下なんかでよく人がしゃがんでいた。べつに病気になるからではなく、立っているよりは、そうしたほうが、腹が減らないからである。私は聖歌隊の練習がすむと、他の人たちといっしょに叔父の家に行き、電熱器でこんがり焼いた白いパンにバターを塗って食べるのがたのしみであった。白パンもバターも統制品で、高い闇値で叔母が手に入れてくれるのである。

当時叔父は、子孫に遺産をのこすことをあきらめて、白いパンとバターに有金をのこらずつぎこむ方針をとっていた。なぜ彼がそういう決心をしたのか、べつだんせんさくすることなく私は日曜ごとに坂の上にある赤煉瓦の教会へ出かけ、白いガウンを羽織って一曲だけさんびか

をうたった。こんどは注目する女性がないので、隣の男と私語をかわし、牧師の似顔のかわりに下手くそな詩のようなものを書きちらして時間をつぶし、そして帰りに叔父の家で白パンを食べた。

このようにして私は合唱とつきあいを始めた。音楽やキリスト教に心を燃やしたためではなかったことが、申しわけなく思われる。

（カワイ合唱新聞 一九七〇年三月一日）

中途半端

遠藤周作氏夫妻を先達に、矢代静一氏夫妻、井上洋治神父、私の六名で、約十日間イスラエルを廻ってきた。これで三度目の遠藤夫妻を除いた四人にとっては、聖書を通じて地名にはおなじみでも、初めて見る土地である。

なお分類すれば、専門家の井上神父は当然として、二組の夫妻はカトリック信者で、私のみは非信者だ。非カトリックのみならず非クリスチャンという意味である。

しかし、これがまた、そうは判然と言いきれぬところがある。私はキリスト教徒の両親を持ち、中学時代にプロテスタントの教会で洗礼を受けている。教会にご無沙汰しているけれども、まだ洗礼の取消し（そんなものがあるかどうか）は受けていないし、自分で無宗教の方針をしかと定めたわけでもない。だから、イスラエルへ行くと聞いて、知人のなかには、

「巡礼ですか？」

と訊ねた人もいる。そう言われると、なぜか屈辱的な感じで、

「いや、ただ見に行くだけです」

と、むきになって訂正した次第であった。

四国遍路に行ったことがある。正月に四日間ほど、徳島から室戸岬まで打って歩いただけだが、この時は「へんろ」とか「巡礼」と言われることに抵抗はなかった。勿論信心からではなく、「見に行った」だけのことなのだが。

思うに、四国の場合は、しょせん偽者であって、お大師さんとは意識の深みに於て殆どつながりがなかったから、何と呼ばれようと平気でおれたのだろう。キリスト教の方には、縁もゆかりも恨みもつらみもあり過ぎて、歪んだコンプレックスが抜けない所から、むきになったり反撥したのだろう。

出発するまでに、そんな手続きや発見があった。

エルサレムに着くと、また様相が変わった。案内役のヘブライ大学生（日本人）を含めて、六人の信徒と、一人の非信徒という組合せで、聖地巡りがはじまった。信徒といえどもそれぞれ個人的な理由や状況に応じて、対象を「見る」部分と、「祈る」部分の割合が、個性的なヴァリエティを持つわけである。しかしながら、かりそめにも信徒たる上は、トータルとして必ず

「祈る」部分が存在する。（もちろん、六人を通じて、キリストの十字架が立てられた穴だの、よみがえった墓だのという「聖蹟」を、そのものとして信ずる人はいない。そういうことを言っているわけではない）

一方、私の方は、やはり「見ている」ばかりであった。ことさらそうしたわけではなく、むしろなるべく祈ろうとつとめさえたのであるが、せいぜいむかし日曜学校へ通っていた頃の感情を、感傷的に再生したにとどまった。

昼間は、エルサレムの町の内外、ユダの荒野、死海沿岸、考古学上の発掘現場などを精力的に廻り、夜は一部屋に集まって、町で二千円すこしで買えるジョニ赤を水割りで飲みながら、主として二千年まえのイスラエルの歴史的情况についての討論であった。

私はキリストの伝記について、多少の知識は持ち合わせているつもりであった。しかし、討論を聞いていると、初めて耳にすることばかりである。遠藤氏によれば（私の記憶違いがあれば申し訳ないが）例えばパリサイ派とはアメリカ占領下の社会党右派のような存在であったらしい。そういうとらえ方を聞いていると、私はかつて聖書というものを、ただ情緒的に眺めていたに過ぎないことがよくわかり、情ないのであった。

興味という点にしなければ、たとえばエルサレムの城内がじっさいはからからに乾いた岩山の上の、土と石で出来たスラム商店街だと知ただけでも私にとっては大へんな収穫で、日本へ

帰ってからでは待ち遠しいので、その場でマタイ伝だけをもう一度読みなおした程であった。

だがしかし、ここで私は面白く「聞き」「見た」だけであつて、

「いったいきみは、なんでエルサレムへ来たんや？」

と聞かれると、「さあ……」と詰まってしまうて、ただの知識として横から眺めて面白がつているに過ぎないことが、どうしようもなく立証されてしまうのであつた。だから、キリストの復活という、いちばん核心に話が及ぶと、そこへ直面することができなくなるのである。

四日目に、私たちはエルサレム近辺のはげ山や荒野をあとにして、緑のガリラヤをさして北上した。

「ガリラヤは、ええぞ」

と、遠藤氏が車の中で話しかけた。

「このあたりとはガラツと違って、やさしくてやわらかい」

それから、ニヤリと笑つて、

「こんばん、きみんとこへ、キリストがあらわれたらどないする？ 信仰するか？」

と言われた。

私はほんの束の間だが、そんなことになったら恐ろしいと思った。